

---

# アメリカンヒーローズ

ユロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アメリカンヒーローズ

### 【Nコード】

N6451X

### 【作者名】

ユロ

### 【あらすじ】

懐かしのTV映画や小説のヒーローたちが集まり、悪い人たちをやっつける、勧善懲悪のーてんき小説

## プロローグ

自宅のリビングでニュースを見ていたその男は、政府の下した決断に狂喜乱舞した。

「やったぞ！F-35Bの開発が中止になった！当然じゃないか、普通の飛行機は、ギューンと滑走して飛び立ち、グウォーンと着陸するもんだろ？あんな、ハチドリの出来損ないみたいに飛ぶ戦闘機が、栄光あるアメリカ軍に配備されてたまるか！おい、ベッキー、ビールを持って来い！今日はサントリー・モルツにしてくれ！」

妻のベッキーは、

「なんでアメリカのビールじゃないんですか？」

「今日、日本空軍がF-35Aを採用したからだ。それに日本のビールの味は、彼らの作る半導体のように、緻密でいい味出している。」

リビングで子供のようにしゃく白髪頭の男。彼の名前は、ロバート・ゲーツ前国防長官。F-35Bの開発に、強行に異を唱えた男だ。

彼は、キンキンに冷えたビールを口にしながら、

「だいたい、3機種を一度に開発しようと言う所に無理があるんだ。まあ、空軍向けのA型、海軍向けのC型位なら大丈夫だろう。マクマナラの時代より、エンジンアも賢くなっているからな。だが、STOVL（短距離離陸 垂直着陸機）のB型まで一緒に開発するのは、まずい。構造が違いすぎる！案の定、開発費の高騰を招いてしまった。これでB型の開発費をA/C型に回して、全体の開発費を抑えられるだろう。」

「その説明口調のせりふ、相変わらずだな。」

その男は、リビングの隅からフツと姿を現した。

「君はいつも同じ姿だな。白のスーツと、片方がサングラスのメガネ。そして杖。若いんだか歳なんだか、サッパリ分からね。」

ゲーツは、白いスーツの男に手を差し出しながら言った。

「アークエンジェル。ようこそ、現実の世界へ。」

「CIAの仕事で、架空の経歴・架空の名前、全てが架空の世界に生きていたからな。」

2人は、硬い握手を交わした。

「CIAを引退し、のんびり酒とポロを楽しむ生活をしていたと思つたら、君からの召集だ。どうせ、ろくでもないことを考えているんだろう?」

アークエンジェルの問いにゲーツは、

「実は私も、呼び出されたクチでね。相手は、大統領だ。」

「大統領?」

「そう。大統領の指示の下、君に与える特殊部隊が任務を遂行するのだ。」

「特殊部隊?」

「おまえが指揮する部隊と言つたら?」

「エアールフは、もうないが、それに匹敵する機体があるのか?」

「バカ言え!超音速で飛べるヘリができれば、コリアートロフィー(米航空界における最高の賞)ものだ!だが、分野によっては、エアールフを超えている。」

「それは楽しみだ!」

「あと、制空権維持のために、固定翼機を付けてやろう。私が葬り去った、『最高の』機体を。」

ゲーツは、含み笑いをしてアークエンジェルを見た。

アークエンジェルは、また忙しい生活に戻るのかとため息をつき、ベッキーに声をかけた。

「奥さん!『いいちこ』と梅干とお湯ください!」

## プロローグ（後書き）

>登場人物<

- ・ロバートゲーツ
- アメリカ前国防長官
- ・ベッキー・ゲーツ
- ロバート・ゲーツの妻
- ・アークエンジェル
- 元CIA特殊部隊隊長
- ・マクナマラ

ケネディ/ジョンソン政権下の国防長官。海軍機と空軍機の共用でコスト削減を試みたが、見事に失敗。

## 第1話

アラバマ州フォートラッカーの陸軍航空博物館に所蔵のステルス偵察攻撃ヘリコプタRAH-66コマンチと、スミソニアン博物館に移送中だったF-35Bの試作機が姿を消した！

本来なら新聞で大きく取り扱われるような大事件だったが、一流紙のトップを埋め尽くしていたのは、ヨーロッパの経済不安、それとオバマ大統領の白人疑惑だった（肌の白いオバマ大統領の幼少期の写真の発見と、高校時代に通っていた日焼けサロンの店員の証言が発端となった）。

一方、タブロイド紙の記事は相変わらずで、「エルビスとJB、マイケル・ジャクソンのゾンビが、墓場でダンス対決」だの、「パリス・ヒルトン、UFOにさらわれて人格改造受？コンビニの募金箱にブラックカードを寄付！」と、書きたい放題だった。

そんなタブロイド紙を、黒いスーツを着た男が数紙購入し、車に戻った。

車内でペラペラめくっていると、「金星人、日本の元ファーストレディの指示で、ステルスヘリ、ステルス戦闘機を強奪！」という記事に注目した。そして運転席の相棒に声をかけた。

「おい、J！この記事は怪しいな！」

「K、その記事見せてくれ。ああ、確かに怪しい。ただ金星人じゃなくて、彗星系の奴らじゃないか？やつら、派手に伸びる尻尾を隠したがっていたから、ステルス技術が有効だと考えたんだ。」

「本部のZに照会してみよう。」

Kは、Zに秘匿装置付き携帯（まだスマホ版は支給されていない）で確認を取ると、ため息をつきながら携帯を切り、Jに話し始めた。

「今回の件は、地球人の事業だ。NSAやCIA、DIAにも属さない謎の組織の事業で、仕事は我々とかち合わないそうだ。」

「それじゃあ、一安心だ。K、朝飯でも食べに行こう。」

そういうと、車は静かに動き出した。トヨタ プリウス M I B バ  
ージョンは、リッター100kmの超低燃費で、行きつけのダンキ  
ンドーナッツへ向かった。

## 第1話（後書き）

>登場人物<

- ・ J : M I B の年配の方。白人。
- ・ K : M I B の若い方。黒人。
- ・ Z : M I B のボス。メタボ気味。

## 第2話

私は今、湖畔まで延びるウッドデッキの上でシタールを弾いている。

これまでチェロの演奏を趣味としていたが、先日ボストン・ポツプス・オーケストラのチェリスト採用試験に不合格になり、自棄になった私は、愛用のチェロを楽器屋に売り、差額を足してシタールを買ったのである。シタールを選んだのは、COCO一番屋ボストン支店でカツカリーの3辛を食べていた時、BGMにラビ・シャンカールの曲がかかっていたからだろう。

最近不景気で、私には仕事がない。友人の経営するサンティエーニ航空も廃業したためだ。ともに戦ったケイトリンは、結婚しながらも警察官の仕事を続けている。やはり公務員は、強いな！

でも私は、これまでの生き方に後悔していない。  
最高の友を持ち、最高のへりを駆り悪と戦い、そして兄を奪還した。

強いて後悔したといえば、COCO一番屋の3辛が予想以上に良かったことくらいだろうか？

「シタール入門 これであなただもジョージの師匠！」というテキストを読みながら、のんびりシタールをマスターしていく日々。軍人恩給で普通の生活は維持できるし、今の生活に不満はない。

しかし、シタールでは埋められない心のパーツは何なんだろう？  
そう考えた直後、私は腹部に何か刺さる感覚を覚えた。銃声が遠くから聞こえ、私は痛み之源に視線を向けようとした時には、意識を喪失していた。

## 第2話（後書き）

> 人物説明<

- ・ラビ・シャンカール：インドのシタール演奏の第一人者。Bea-  
tlesのジョージ・ハリソンのシタールの師匠。
- ・ケイトリン：元テキサス・ハイウェイパトロールの女性警察官で  
エアポリス隊員。エアールフ3人目の要員。

### 第3話

私は、アメリカ空軍ネリス基地のBXでクワス（ロシアの清涼飲料水）を飲んでた。演習の合間に飲むクワスは、最高だ。もつとも、一般的アメリカ人の口にクワスは合わないで、私と僚機パイロットのパヴェル・チェコフくらいしか飲んでいないが・・・

私の任務は、レッドフラッグ演習でロシア空軍パイロット役で敵役をすることだ。

私が相手をするのはヒヨッコパイロットだが、彼らの操縦する機体は驚異の戦闘機であり、私は一瞬たりとも気を抜けない。

F-23 マスタング2。

この新鋭機は、私がかつてソ連から奪取したMiG31ファイアーフォックス（ソ連は、ファイアーフォックスが奪われ、技術資料も失われたことから、急遽MiG25の改造型をMiG31と名づけ、始めからファイアーフォックスなどないかのように装っていた）の技術を応用して設計された新鋭機だ。ファイアーフォックスの持つ高速飛行能力（Mach5）、ステルス性、考えるだけで機体を制御できる「思考誘導装置」などをアメリカ流にリファインし、さらに多くの新規技術を盛り込んだ恐るべき戦闘機で、この戦闘機の出現が、F-22の調達数を激減させる要因となった（なお、このF-23はノースロップ社製YF-23とは無関係で、開発は、ロッキード・マーチンのスカンクワークスである）。

F-23相手に我が乗機Su-35で戦いを挑むのは、ゼロファイターでF-15と戦うようなものだ。

それでも私がほとんど落とされないのは、戦闘機のスペックの差を越える何かを持っているからだろう。

「ガント！クワス持ってきたぞ！」

「ありがとう、チェコフ」

私は、冷えたクワスを一口口にした。するとブラックアウトを起

こしたように視界が暗転し、平衡感覚を失っていった。  
「チエコフ、これは一体……」  
それがネリス基地で放った最後の言葉となった。

### 第3話（後書き）

> 人物紹介<

・パヴェル・チエコフ：アメリカ空軍アグレッサー部隊のパイロット。名前は、スタートレックの搭乗員より拝借。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6451x/>

---

アメリカンヒーローズ

2011年10月21日12時59分発行